

海野先生を送る

尾崎 洋二 (天文学教室)

海野先生にはじめてお目にかかったのは、25年以上も前の私が学部学生の時である。当時の天文学教室は麻布のソ連大使館横の木造の見すばらしい建物にあったが、その建物がアメリカ帰りのハイカラな先生の雰囲気似つかわしくない気がしたのを、今でも覚えている。私が大学院で直接指導を受けるようになった当時の先生は、プリンストン大学、ミシガン大学での2年間の研究生生活を終え、帰国まもない頃で、いわば研究に一番脂の乗った時であった。当時の天文の大学院生は、自分の研究課題について新しい考えや進展があると、まず先生の所へ行って報告しディスカッションしてもらうのが通例であった。そのため、先生の研究室は門前市をなすがごとくで、先生の空き時間を見つけるのに苦労する程であった。先生は、こうした大学院生の話に忍耐強く聞かれ、適切な助言を与えると同時に学生の話のなかに何か秀れた点を見つけ出し、さらに研究を推し進めるよう励まされるのが常であった。こうして先生に励まされて一人前の研究者に育っていった者は、私を含めて沢山いたと思っている。

先生は昭和22年本学天文学科を卒業された後、東京天文台助教授を経て昭和28年理学部天文学科に移られ、以後一貫して天文学科の教育・研究の中心的指導者として現在に至ったのである。先生の御専門は理論天体物理学であるが、その内容は輻射輸達、太陽磁気流体力学、恒星安定性論など大変多岐にわたり、沢山の優れた論文を発表されている。例えば、先生が世界にさきがけてされた磁場のある場合の輻射輸達の定式化は「海野・ラチコフスキーの式」として30年後の現在でもよく引用されている。また先生の

流体力学、電磁流体力学的研究は、対流・脈動・不安定性などの広範囲の現象をカバーし、また対象となる天体も、星間ガスから太陽・恒星そしてクェーサーとほとんどすべての天体におよんでいる。

先生はまた、天文学科主任、大学院主任、東京大学評議員などを務められるとともに、日本天文学会副理事長、同欧文報告編集長など学会関係のためにも力を尽された。

先生の学問に対する態度は大変オープンで、天文学を研究したいという人はすべて受入れるというのが先生の基本方針であった。そこで、学生が自分のやりたいという研究テーマに適切な指導教官が見つからないという場合、大抵先生が指導教官を引受けるということになり、いつも先生が一番沢山の学生をかかえるという結果になった。また先生は留学生の受入れにも熱心で、特に最近数年はアジア諸国との交流に力をそそがれ、御自身でインド、中国、韓国の国々を訪問され、これらの国々の天文学者との交流を深められた。

あまり知られていないかもしれないが、先生は趣味の面でも多才で、旧制高等学校時代に熱中された剣道は二段の腕前。また囲碁では御自身“天文流家元”を唱えられ、中国訪問の際も中国の天文学者との対局を楽しまれた。私自身は不肖の弟子で先生のお相手があまり出来ず残念であった。それでもかなり以前の事であるが、私が井目置いた上で先生に一局打っていただいた事がある。その時私が置石を利用して逃げまくったら、先生は「金持ケンカせず、金持ケンカせずか」と口の中で言いながら打たれた様子が面白かった。先生の多才ぶりを示すエピソード

ドに、昭和30年代のはじめフルブライト留学生として氷川丸に同乗した“口八丁手八丁”の名大早川幸男先生さえも、先生の勝負事での強さに舌をまいたという話がある。また、先生の化石の収集は本格的で、中には大変貴重なものも

含まれているとの事である。

私にとって先生は大学院以来現在までずっと直接の指導者であったわけで、今回の先生の定年退官には感無量のものがある。今後とも先生の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。